# スケッチ-旦那さんはパンダ

山崎力

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スケッチ一旦那さんはパンダ

【Ｎコード】
Ｎ５３７３Ｚ

【作者名】
山崎力

【あらすじ】
世の中の全ての旦那さんは、きっとパンダなんだ。

僕は彼女に告白しようとしていた。
これまでも何度か言い出そうとしたけれど、僕らが話をしているところに誰かが割り込んできて違う話になったり、彼女が意図的か無意識かわからないけれど話を逸らしたりで、タイミングを逃していた。
「それはパンダ的な可愛いさとか、そういうこと？」
「ううん。違う。私の旦那さんはパンダなんだよ。」
会社の昼休みに同じテーブルで、お弁当を食べている時だった。
「その冗談、たいして面白くないよ。旦那さんがパンダなんて」僕は少し作り笑いをした。
彼女は優しく、まるで子供に言い聞かせるように、「面白い面白くないじゃなくて、本当にパンダなんだよ。」と言った。
彼女はもっと現実的な冗談を言う人だ。思いつきの冗談をそのまま口にするような人ではない。
僕は自分が告白したい気持ちでいっぱいだったので、彼女のこの話に付き合う余裕がなかった。
二人きりでお昼を過ごしている今、告白したかった。
「パンダより人間のほうがイイでしょ？」
そして、人間の僕は、君を愛してると言ってしまおうと思った。
彼女は自分で作ってきているお弁当の卵焼きを食べながら、少し考えていた。いや、考えているように見えただけで、彼女の答えは決まっていたのかもしれない。
「うーん、でも、パンダは優しいんだ。だから、こんなわがままな私と合うのかも」
そう言ってお箸をお箸箱に入れた。彼女のお昼ご飯はもう終わる。
ここで話を伸ばさないと、彼女は給湯室でお弁当箱を洗う為に席を立ち、話が途中で終わってしまう。僕は少しでも自分の気持ちを伝

えたかった。
「旦那さん、パンダってことは笹とか食べるの？」
「そうだよ。だってパンダだもん」
「俺をからかってる？」
彼女は感情が抑制された落ち着いた目でしばらく僕を見つめた。そして「からかってないよ」と言って、席を離れた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5373z/

スケッチ-旦那さんはパンダ

2011年12月18日01時47分発行